

松本清張記念館

◆館報◆
2020.1
第62号

しかし、被害者意識は、周囲が考えている程度よりはずっと深刻な場合が多い。
いわゆる加害者のほうではさほどの気持なく思っている、被害者はそれをずっと深く、重いものに受けとるのである。



『ミステリーの系譜』昭和43(1968)年 新潮社

『ミステリーの系譜』は、昭和42(1967)年8月11日~43(1968)年4月5日『週刊誌』に掲載された連作。※書籍化の際、『闇に駆ける猟銃』が『闇に駆ける猟銃』に改題され、『脱獄』『夏夜の連続殺人』が未収録となった。

現在入手しやすい本
『ミステリーの系譜』中公文庫、松本清張全集7巻

睦雄の場合、貝尾地区の多くの人々は、睦雄の病氣のことをそれほど嫌ったこともなければ、彼を除け者にしたことはいないと云っているが、これを弁明とみないにしても、与える側の測定で受けとる側の被害意識を云うことはできないのである。

——これは現代の都会生活にも通じることである。

「闇に駆ける猟銃」より

作品紹介

『ミステリーの系譜』は、実際に起こった事件を作品化した『闇に駆ける猟銃』『肉鍋を食う女』『二人の真犯人』の三篇から成る連作集である。

「闇に駆ける猟銃」は、津山事件（一九三八年に岡山県津山地方で起こった。一人の青年が二時間足らずの犯行で三十人を殺害した事件。）について、その背景となった閉鎖的共同体と、凄惨な殺害の一部始終を書いたノンフィクションである。清張は、エドガー・アラン・ポーの『アッシュ家の崩壊』を引用し、対比する形で、貧しい山間の村が舞台となった事件を「背景が平凡であればあるほど物語の悲惨は劇的になってくる」と述べている。ちなみに、同じ事件をモデルにした作品が、横溝正史の『八つ墓村』である。

「肉鍋を食う女」は、一九四五年群馬県尾沢村で起こった肉食の事件を扱った。やはり閉鎖的な集落と、敗戦時の食糧不足を背景にしている。

「二人の真犯人」は、タイトルどおり二人の被告が二人とも起訴になった事件、鈴木森おハル殺し事件（一九一五年を書いたもの。冤罪についての示唆に富んでいる。

「闇に駆ける猟銃」で清張は、睦雄が閉鎖的な状況下で肺結核による差別や疎外を受けたことが犯行の動機であることを詳らかにし、「これは現代の都会生活にも通じることである」と書いた。まさに現代の私たちを戦慄せしめる事件にも共通しているといえるだろう。

（学芸員 柳原暁子）

目次

松本清張記念館開館21周年記念講演会	2
特別企画展「E・A・ポーと松本清張」	4
SEICHO Cafe オープン	5
松本清張記念館の魅力向上事業	6
点描 作品の舞台を訪ねて	6
友の会活動報告	7
トピックス	8

開館21周年記念

柚月裕子講演会「小説がなくならないわけ」

令和元年8月4日(日)
男女共同参画センター！
ムーブ
参加者400名

小倉の街の印象や清張記念館の

感想はいかがですか？



私は現在山形で暮らしており、これまでも取材や旅行で九州には何度か来たことがありますが、昨日小倉に到着してまず最初に感じたのは、「アツい」ということです。ここ数年、全国的に夏の猛暑が続いてはいますが、同じ晴れで同じ気温だとしても、やはり九州の日差しの強さは東北とは違う気がします。例えるならば直火焼きというか、本当にジリジリと夏らしい感じがします。そして、ちょうど小倉で大きなお祭りがあつて、昨夜も少し散策してみましたが、祇園太鼓の勢いや街の人々の活気に圧倒されました。本当に皆さん老若男女問わずお元気で、大変楽しい気分になりました。

今回初めて松本清張記念館を訪れることができたんですが、いちばん印象に残ったのは清張さん手書きの原稿です。現在では9割ぐらいの作家さんがパソコンで執筆しているのではないのでしょうか。展示されている原稿には編集者の朱入れも記されていたので、当時の編集作業の様子まで垣間見ることができました。その辺りは私も作り手として特に興味深く拝見しました。そして、知らない清張作品がたくさんあつて本当にうれしく思いました。著名な大作家が生産で書いた作品のうち、私が知っているのはまだほんの一握りで、これからも未知の作品をこんなに読むことができるんだと。

私は縁というものを大切にしています。それは人とのつながりだけでなく、土地や作品といったものとの出会いも含めてです。ですから、今回こうして講演のお仕事で小倉を訪問したことも、私の人生の中に大きな意味を与えてくれたと感じています。

先生の幼い頃のエピソードや小説との

出会いについてお聞かせください

私は岩手県釜石市で生まれたのですが、父が転勤の多い仕事だったため、私も幼い頃から転校続きでした。数年ごとに引越しを繰り返すので、やまとその土地に馴染んだと思う頃にはそこを離れなければならぬという暮らしてました。私は現在でも、「知りたい」という気持ちを原動力として小説を書いています。私もこの「知りたい」という気持ち、幼い頃のそうした生活の中で育まれたのだと感じています。ずっと同じ土地で暮らしている方にしてみれば、例えばそこに石碑が建っている理由や伝統的なお祭りの由来、そしてこの道がどこに繋がっているのかといったことについて、当たり前のよう「存じないので、いちち疑問に感じる」ともなってしまう。しかし途中からそこに移り住んだ者からすれば、それらはすべて「なぜ？」の連続になるはずなんです。

私には幼馴染といえるような人が思い浮かびません。もちろんその時その時で一緒に遊んだお友達はいましたが、転校するたびに新しいお友達とから人間関係を作り上げていかなければいけなかったのです。そんななかで、仲良くなる人もいれば反りが合わない人もいるわけで、私はやはり「この人はどんな暮らしをしてきたのだろう」とか、「どうしてこの子はこんなことを言うのだろう」といった、人に対しても興味や疑問を常に抱いていた子供だったと思います。

今のようにスマートフォンもない時代でしたし、我が家ではテレビも見たい番組がある時につけてそれを見終わったら消すという習慣でしたから、手持無沙汰な時間にはやはり本を読むことが娯楽でした。両親とも読書が好きだったので、私も幼い頃から家にある本の読める部分だけを拾い読みして時間つぶしをしていました。学校の図書館で児童文学を読むこともありましたが、母からか月に二冊だけ本を買ってあげると言われ、私が選んでいたのは短編集でした。子供ながら、長編だと二冊の本に一つのお話しか書かれていないのももったいないと考えていたのでしょう。

小説の文庫本を初めて手にとったのは小学校二、三年生の頃でしょうか、横溝正史だつたように記憶しています。連続ドラマで金田一耕助シリーズが放送されていて、その中で『本陣殺人事件』の密室殺人トリック

がすごく面白くてもう一度見たいと思いましたが、当時はまだすぐ録画して再生するとか、いつ再放送があるか調べて待つとかは難しかったので、原作の小説を親にねだりました。当時の角川文庫のおどろおどろしい表紙は印象に残っていますが、内容は難しすぎてまだ読めず、置いたままにしていた気がします。

ちなみに清張作品との出会いも映像からでした。テレビ放送で映画『疑惑』を見て、岩下志麻さんと桃井かおりさんの丁々発止が本当に面白く、すぐ原作の本を読もうとしましたがやはり難しすぎて、ちゃんと読んだのは大人になってからでした。

作家デビューのきっかけや、

ご自身が作家になって感じたことは？

私が四十歳で作家デビューしてから十年を過ぎますが、作家としては遅咲きな方だと思います。それまでもずっと読書は好きでしたが、自分で小説を書くとか作家になりたいとか考えていたわけではありませんでした。

きっかけは、地元の小説家講座に通い始めたことでした。私の住む山形市で月に一回開催され、毎回第一線で活躍されている作家さんが受講者の作品を講評してくださるのです。地元の新聞でその講座の紹介記事を読んだ、なんともいっても、それまで書店でお名前を拝見するだけだった作家の先生方に直接お目にかかれてしかもお話まで聞けること、そして受講料がリーズナブルだったことが大きな魅力でした。私は早くに結婚して家事や子育てに専念し、時々パートに出るくらいではほとんど外に出て働いたこともなく、自分の自由になるお金もそんなになかったのですから。

私は作家になつてから、すごく計算が上手になつたと思います。読者であった頃は、作家がどのように生計を立てているかが見えていませんでした。作家になつた人には当然、夢のような印税生活が待っているのだと思つていました。ですが、私自身がデビューしてみると、印税収入だけで食べていくというのは本当に難しいことなのだど痛感しました。プロですので自分が書いたものに原稿料が発生しますが、それが本当に重く感じました。今自分が書いている文章に、その原稿料を頂けるだけの価値ははたしてあるのだろうか。特に私の場合、生活のために作家になつたわけではなく、ただ書きたいという思いが先にあつて、たまたまプロデビューした後にそうした現実的なところがあつてきた感じでした。

もうひとつ、作家になつて意外だと感じたことは、いろんな意味でアウトドということ。どんなお仕事でも、注文や依頼の内容がある程度決まつていて、それをどれぐらいの値段で引き受けるかといったやりとりを経てからスタートするのが一般的だと思えます。ところが文芸や

出版の世界では、必ずしもそうではないのです。実際『盤上の向日葵』のときも、中央公論新社の方から「なにか書いてみませんか」と打診があったのは、連載が始まる二年くらい前だったと思います。それから将棋をテーマにした作品にしようとか、そのためには何を調べないといけないとか、どこに取材に行こうとか、いろいろと煮詰めていってプロットを考え、連載をスタートさせるという流れです。ですので、冊の本になるまでは、その作品が本当に書店に並ぶのかは正直わからないわけです。

先生の作品について、着想や取材など、創作秘話があればぜひ伺いたいのですが

『孤狼の血』は、悪徳警官と暴力団の抗争を題材としてミステリーに仕立てた作品で、昨年映画化もされました。それ以前から私の作品には弁護士で元検事である佐方真人を描いたシリーズがありました。警察小説は書いたことがありませんでした。『孤狼の血』を執筆するにあたり、担当の編集者さんから「佐方を、白の正義とするなら、今度は、黒の正義」を描いてみませんか」とのアドバイスを頂きました。そこで真つ先に浮かんだのが悪徳警官を主人公に据えることでした。たとえ悪徳と呼ばれようとも自分の信念を持っている、つまり百人いれば百通りそれぞれの正義や価値観がある、というのが私の持論です。そしてストーリーには必ず敵役が必要ですので、主人公と対峙させるために暴力団を登場させたくわけです。私はもともと『仁義なき戦い』などの映画が好きですので、やはり自分でも、男の熱い闘いを書きたいという気持ちもありました。私は小説の舞台となる、あるいはそのモデルとする土地には少なくとも3回は足を運ぶようにしています。一回目は前取材として、執筆前のある程度作品の方向性が決まったタイミングで、その土地に私自身が立つてみて何を感じるかを確かめに行きます。『孤狼の血』の場合は広島でしたが、作品を通して私が描きたかった熱さと、実際に広島街が持つ熱さがぴったり一致したと感じたので、「これは間違いない」と確信して書き始めました。そして二回目は執筆途中に必要なに応じて現地を訪れますし、三回目は連載終了後に単行本としてまとめなおす過程で、確認も兼ねて再訪することが多いです。

広島県警の方にもお会いしてお話を伺うことができましたが、さすがに本物の暴力団関係者への取材は難しいですので、その辺りはノンフィクション作品や実際にあった抗争の資料などを読み込みながら書き上げました。

裁判所にも取材に行きました。一般の方向けの内部見学ツアーに申し込んでの参加というかたちでしたので、ひと通り見学ルートを巡ったあと、引率の職員の方が質問に答えてくれる時間がありました。他の参加者は裁判所勤務志望の若い方ばかりで真剣で熱心な質問が続くなか、私は小説に活かすために「職員の方の通勤方法は？」とか「お昼はどこで食べるんですか？」「普段の楽しみは？」といった質問ばかりでしたので、とても浮いていたかと思えます。

見習いである家裁調査官補は、最初に実地研修として、全国に五つくらいある大規模都市の裁判所のいずれかに配属されるそうですが、私はこの作品で主人公が少年犯罪への対応を通して成長していく様を描きたいと考えていました。そして少年犯罪事例が西日本に多いという統計データを実際の犯罪白書で目にしたので、福岡の家庭裁判所をモデルとして選んだわけです。

『盤上の向日葵』が刊行された二〇一七年はちょうど将棋ブームの真ん中でしたが、連載はその二三年前くらい前です。またブーム到来の予兆すらなかった頃です。これは本当に運がよかつたのでしょうか言えません。

私は映画『麻雀放浪記』を子供のころに見て、麻雀に賭ける男たちの姿がずっと印象に残っていました。そして勝負や人生を真剣に生きるというその姿勢は、清張作品にも通じるところがあると感じています。とくに『砂の器』には、人生を必死に生きる様や人間の業といったものが重厚に描かれています。いつか私もそんな人間ドラマを書きたいと思っていました。さすがに担当編集者さんに『麻雀放浪記』『砂の器』を合わせたような作品を書いてみたいと相談したときには、とんでもない挑戦だと驚かれましたが、なんとか説得しました。ただしその後も検討を続けた結果、より多くの方に親しまれている競技であること、なおかつ運ではなく実力のみで一対一と真剣勝負をするプロの世界を描くために、将棋をテーマとすることにしました。私の持論でもある人生の理不尽さと、将棋のどこまで行つてもフェアな部分とを同時に描くことで、それぞれの特性を際立たせることができると感じました。

特に後半部分を執筆している最中は、私の頭の中にも『砂の器』のイメージが自ずと



▲中央公論新社で『盤上の向日葵』を担当した編集者菅龍典氏(現在は講談社に在籍)の進行により、和やかな雰囲気の中でトーク形式の講演を聴くことができました。

浮かんでいました。私は清張作品で描かれた人間の影の部分に惹かれますが、やはり光が強いほど影は濃くなるという、本当に切ない部分を意識しながら書き上げました。

お休みの日はどのようにお過ごしですか？

私の仕事には基本的に、平日や土日祝といったカレンダーがないため、明確な休日といった感覚もないような気がします。常にメ切を基準に生活しているというか。私だけでなく、きっと多くの作家さんも同じなのではないかと、休みであつて休みでない、遊びであつて遊びでない、すべての経験がどこかで作品に反映されていくものだと思っています。ただし、自分の生き方そのものがどこでどのように作品につながるか、それは自分でも未知数ですが。

一般の方が休日を通すのと近い感覚として挙げるとするならば、執筆の途中でちょっと時間が空いた時に、家の掃除をしたり二匹の愛猫と戯れたりすることでしょいか。やっぱり猫がいらないと私は書けないと思います。犬と比べても猫は何の役にも立たないと思われがちですが、どんな時もあるままの私を受け止めてくれる存在だと感じています。

先生にとって、小説の持つ普遍性、つまり小説がなくならぬわけとはなんでしょうか？

私は東日本大震災の津波で両親を亡くしました。日本全体が大きな悲しみと混乱に包まれましたが、その時に私を含め表現者の多くは、はたして小説を書く、あるいは歌ったり演じたりする意味があるのかと、自分自身に問いかけたのではないかと思います。

よく『シエクスピアの時代に物語は書きつくされている』などと言われます。ミステリーのストーリーも、日常があつてそれが壊される出来事が起きて、そこに謎があつたり元の日常に戻そうと一生懸命頑張る人々がいたりバリエーションは様々ですが、基本的な構造はおとぎ話と同じはず。それでもなお、これだけ多くの小説や創作物が生み出され続け、書く人や読む人がいなくなることはないはずなんです。

おそらくそれは、書き手がその出来事をどう受け止めているのか、そのときどんな選択をするのかを、読み手は知りたいからなのだと私は感じています。つまり、人がどう生きるのか知りたいという気持ちがある限り、小説はなくなることはないのです。

小説は人々に喜びや癒し、気づきといった様々なものを与えることができます。いつもポケットや鞆の中に冊、人生の相棒のような存在として、小説をより身近なものに感じていただけると幸いです。

清張生誕110年・ポー生誕210年
特別企画展

エドガー アラン
「E・A・ポーと松本清張」

令和元年11月15日【金】～令和2年3月1日【日】

松本清張記念館 企画展示室

好評
開催中!



令和元年11月15日、松本清張記念館において「E・A・ポーと松本清張」展が開幕しました。

開会式には、巽孝之氏（慶應義塾大学文学部教授・日本ポー学会会長）はじめ、北九州市長などが出席し、華やかにテープカットが行われました。続いて始まった巽教授による講演「推理小説の起源」では、ポーの先駆的な偉業や後世への影響、作品のメタファーを当時の社会状況から読み解いた内容に、座席数を超える50名余りの聴衆が熱心に耳を傾けました。

「E・A・ポーと松本清張」展は令和2年3月1日まで開催しています。ぜひ、足をお運びください。



テープカットの様子



会場の奥には、ポーと清張をイメージした撮影スポットが。本棚に、日中韓で翻訳された両作家の本を配しており手にとって読むこともできます。



貴重な資料ばかりの伊藤詔子コレクション、最大の見どころは《ポーの遺髪》。写真中央は資料解説をする伊藤氏（広島大学名誉教授、日本ポー学会副会長）。

特別企画展関連イベント 朗読劇

「ゼロの焦点」を開催しました。

令和元年11月21日【木】 19:00～

門司赤煉瓦プレイス・赤煉瓦交流館（北九州市門司区）

特別企画展の関連イベントとして、11月21日に朗読劇「ゼロの焦点」を開催しました。

第一部は当館の柳原学芸員による清張作品に登場するポー作品についての解説や劇団前進座によるポーの詩の朗読が行われました。第二部では朗読劇「ゼロの焦点」が上演され、100名を超える来場者が朗読劇を堪能しました。



2019.10/25^⑤ SEICHO Café

静聴カフェ

オープンしました!

小倉城周辺の四季折々の自然を感じなら、
おくつろぎください。

春は桜… 夏は新緑… 秋は紅葉… 冬は雪景色…と
楽しんでいただけるようテラス席などもございます。

SEICHO Caféは入館料無料にてご飲食いただけます。

団体様でのご利用も可能です。お気軽にお声をお掛けください。

お近くにお越しの際は、是非お立ち寄りください。



MENU



アジフライカレー 890円



ローストビーフ重 1500円



カレーうどんアジフライを添えて
(冬季限定メニュー) 850円



抹茶ロールケーキ 380円



オリジナルブレンドコーヒー 480円

そのほかにも
サンドイッチやパスタ、
ドリンクなどございます。

※価格は全て税込みです。

Instagram・フェイスブック、はじめました!
詳しくはQRコードからcheck!!



フォロー様限定
キャンペーン開催中!!



facebook



特別企画展「E・A・ポーと松本清張」限定メニュー

「黒カレーの渦に吞まれて」850円(税込み)

E・A・ポーの「メエルシュトレウムに吞まれて」にちなんだメニュー。

サラダに盛り付けられた“人”や“魚”のチーズを大渦巻に吞まれる漁師さんながらに
黒カレーの中へ入れて召し上がってください。



SEICHO
Café
静聴カフェ



北九州市小倉北区城内2-3(松本清張記念館内)
PHONE/090-4986-9135
営業時間/10:00~16:00
定休日/松本清張記念館休館日(12/29~12/31)

松本清張記念館の魅力向上事業

松本清張記念館の地階に小倉城の石垣と対峙する中庭があるのをご存じでしょうか。石垣を見上げると桜の木があり、桜の時期はもちろん、秋も紅葉が美しく、小倉の街の中にいながらも自然を感じられる空間です。

記念館では、より多くの方々に気軽に来館いただき、ゆっくりとくつろいでいただけるよう中庭の景観や地階を活用した魅力向上事業に取り組みました。

具体的には

- 中庭でミニコンサート等が実施できるように多様性に配慮したステージなどの備品の充実
(一般の方々がミニコンサートや朗読会、講演会等に利用できるよう準備を進めています)
- 植物を植えたプランターやオープンカフェセット(テーブル・椅子)の設置
- 地階カフェ休憩スペースの充実(喫茶「SEICHO Café」)などです。

昨年の10月26日、27日の両日には、中庭でのコンサートやドラマ上映会等を行い、多くの方々に楽しんでいただきました。今後もイベントやカフェの利用を通して、清張の人と作品に触れる機会の充実に取り組んでまいります。



2019年10月26日、27日に行ったイベントの様子



石霞溪と伯備線

「二休、矢戸村というのは、前の引用にも書いた通り、中国山脈の脊梁の北の麓である。いま、岡山方面からは伯備線に乗って米子に向うと、備中神代という駅がある。その駅を過ぎると、すぐにトンネルに入るが、その上が鳥取県と岡山県の県境に当り、同時に分水嶺でもある。トンネルを抜けると、伯耆の国になり、生山駅につく。

その話を聞くふところに、私は日野川の流れや、大倉山の山容や、船通山の巨大な榎の木を格好を眼の前に勝手に描いたものであった。その想像のたのしみから、同じ話を何度も聞かされても、飽きはしなかった。

(新潮文庫「或る」小倉日記「伝」父系の指)

描 作品の舞台を訪ねて 「父系の指」「半生の記」

当館の展示室1には、清張が描いた父・峯太郎の故郷、矢戸(現・鳥取県日南町)の小さなスケッチ画が展示されている。この地域について「父系の指」や「半生の記」には、次のように描かれている。

「矢戸はのう、ええ所ぞ、日野川が流れとつてのう、川上から砂鉄が出る。大倉山、船通山、鬼林山など、いう高い山がぐるりにある。船通山の頂上には根まわり五間もある大けな榎の木が立つとつてのう、二千年からの古い木じゃ。冬は雪が深い。家の軒端までつもる」

傍ら「豪溪」という名の付いた「日野川」上流の溪谷となっている。雪舟が近くの寺に住んでいたという伝説がある。

(新潮文庫「半生の記」)

矢戸がある日南町は溪谷が美しい町である。日野川上流には石霞溪という景勝地があり、点在する巨岩と急流は見る人に力強い印象を与える。一方、下流へ進むと豊かな水がゆつくりと流れ、のどかな景色とも相まって和やか表情になる。この穏やかな表情を持つ日野川の近くに矢戸の交差点があり、その傍には松本清張文学碑が建立されている。

今なお、読み継がれる多くの作品を残した松本清張。昨年10月に読書週間を前に行われた毎日新聞や読売新聞の調査では、平成の心に残った作家や好きな作家としても名を連ね、多くの人々の支持を集めた。

先に引用したこれらの作品では家族を支えるために苦勞の多い前半生であったことや父への愛憎入り混じる複雑な思いがうかがえる。しかし清張は、父・峯太郎がこよなく愛した故郷を機会があることに訪れており、文学碑の除幕式にも出席している。そこには、清張の親を思う気持ちを感じることができ、文学碑にはこう記されている。



穏やかな表情をみせる日野川



松本清張文学碑

幼き日 夜ごと
父の手枕で聞きし
その郷里 矢戸
いまわが目の前に在り

松本清張
(村上美智代)

● 令和元年度年次総会・懇親会

8月4日(日) 参加者29名

総会：北九州市男女共同参画センター・ムーブ 5階

袖月裕子さんによる講演会の後、令和元年度友の会年次総会を開催しました。前年度の事業報告及び決算、役員選任、新年度の事業計画及び予算等の審議が行われ、拍手をもって承認されました。

懇親会は、総会終了後に会場をアルモニーサンクホテルに移して行いました。袖月さん、担当編集者の皆さんにもご参加いただき、和やかな懇親会となりました。

● 清張サロン 記念館 企画展示室

第1回(令和元年度)

9月14日(土)14:00～15:30 参加者39名

- テーマ：「ポスターで見る『清張映画史』」
- 講師：樋口尚文氏(映画監督・評論家)
 風 恵美氏(松本文庫学芸員)

9月に開催した第1回(令和元年度)清張サロンは、「清張映画ポスター展」にちなんで「ポスターで見る『清張映画史』」と題し、映画監督・評論家の樋口尚文氏と北九州市立映画資料館・松本文庫学芸員の風恵美氏から、戦後の映画ポスターデザインの変遷や清張原作映画の見どころ、また、作品が制作された当時の日本映画界の状況等について、解説いただきました。



● 秋の文学散歩

バスハイク：屈折回路と西郷札～産業遺産と歴史を訪ねて

11月12日(火) 参加者32名(事務局含む)

- 訪問先：三池炭鉱宮原抗跡、
 田原坂西南戦争資料館、熊本城

今回は、清張の作品『屈折回路』で描かれる謎の背景として重要な舞台となっている「三池炭鉱跡」と『西郷札』にちなみ西南戦争の激戦地・田原坂にある「田原坂西南戦争資料館」、そして足を延ばして熊本城を訪ねました。田原坂の戦いは、清張のノンフィクション『私説・日本合戦譚』においても克明に描かれています。また、外観の復旧工事が完了したばかりの熊本城も見学し、秋晴れの中、楽しいバスハイクとなりました。



● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申込は、
松本清張記念館友の会事務局まで
TEL.093-582-2761

第21回 松本清張研究奨励事業 奨励金贈呈式

「松本清張研究奨励事業」第21回に入選した2件の企画に対して令和元年8月4日、研究奨励金の贈呈が行われました。いずれの企画も国際的な視野に立った活動・研究であり、成果が期待されます。

松本清張文学の メディアミックスに関する 基礎的研究

代表 志村 三代子
(都留文科大学准教授)



志村 三代子氏

松本清張における GHQ占領に関する 表象と言説の総合研究

川崎 賢子
(立教大学特任教授)



川崎 賢子氏

ミュージアムショップのグッズ紹介

記念館地階ミュージアムショップには、清張の本や当館発行の研究誌・図録はもちろんのことオリジナルグッズも販売しています。

好評につき「湯のみ」と「てぬぐい」の販売を再開しました。ご来館の際は、是非、ミュージアムショップをのぞいてみてください。



■ 湯のみ 600円(税込み)



■ てぬぐい 500円(税込み)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
<http://www.kid.ne.jp/seicho>
制作 (株)ハーティブレン

- 開館時間 午前9:30～午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/600円(480円) 中・高生/360円(280円)
小学生/240円(190円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用いただくと便利です(小倉城・松本清張記念館下車)
車: 北九州都市高速、大手町ランプより5分

第22回 松本清張研究 奨励事業募集

募集要項

- 対象 ① 松本清張の作品や人物を研究する活動
② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)
※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。
ジャンルは問いません。ただし、未発表に限り、個人又は団体可。
- 内容 入選者(団体)に120万円を上限とする研究奨励金を支給します。
- 応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(すべて様式は自由、ただし日本語)を、令和2年3月31日までに応募してください。

※詳しくは、ホームページをご覧ください。また、記念館までお問い合わせください。



講演に行ってきました

日付	主催者・会場等
11/6・7	北九州ひとみらいプレイス 気ままにセミナー

●編集後記●

新たな年を迎えました。去年は魅力向上事業に取り組みましたが、今年も引き続き皆さまに楽しんでいただけるよう努力してまいります。本年もどうぞ、よろしくお願いたします。

特別企画展「E・A・ポーと松本清張」は3月1日(日)まで開催しています。皆様のお越しをお待ちしております。

